

大阪長屋の建設初期から現在に至る住みこなし方の変容に関する研究
-阿倍野区界隈を対象として-

建築計画分野 林 晃輝

阿倍野区界隈では、大正時代より都市住居形態の一つとして長屋が供給され、住宅の整備が行われてきた。それらは「共同性」や「接地性」といった形態的特性、「地に根付き、集まって住む」という文化的特性を有している。現代に至るまで住み手による建替え、増改築が繰り返され住み続けられてきた。本研究の目的は、大阪で形づくられてきた固有の都市住宅である長屋における、建設当初から現在に至るまでの住民の住み方、使いこなし方の変化、地域生活と近隣関係の変化の実態を調査し、現在までの長屋の生活実態を明らかにすることである。

世代交代と老朽化が同時に起きている現状の把握、長屋の現状を理解した上で住人のこれからの住まいの展望を示している。

1. 調査背景と目的

阿倍野区界隈は大正・昭和初期に建てられた長屋群が立ち並んでおり、現代に至るまで住み手による建替え、増改築が繰り返されてきた。しかし、近年では、価値観の変化や、居住者の家族構成の変化や高齢化、建物の老朽化などが問題となり、多くが取り壊され、新たな住宅の建設、土地の駐車場への転用などが行われる。現在では、それらと建設当時の長屋とが混在しながら街を形成している。本研究の目的は、大阪で形づくられてきた固有の都市住宅である長屋における、建設当初から現在に至るまでの住民の住み方、使いこなし方の変化、地域生活と近隣関係の変化の実態を調査し、現在までの長屋の生活実態を明らかにすることである。本研究では既往研究を踏まえた上で、現在の住み手に対するヒアリング調査を実施し、昭和初期から現在までの時代背景を考慮に入れた、住民の長屋を中心とした住みこなし方に重きを置き、その変遷をたどる

2. 研究概要

始めに長屋がどの程度残っているのか実態を把握する長屋残存調査を行った。大阪市阿倍野区阪南町1～5丁目、昭和町1～5丁目、桃ヶ池町、王子町(一部)を調査対象範囲とした。この地域は、1948年、1998年、2006年と長屋残存調査が行われた地域を含んでおり、残存の比較検討を行った結果、2006年に現存した長屋の3割がここ5年で消失(建替、更地化)している事が判明した。

ヒアリングにおいては、調査対象地区内に存在する長屋の中から、任意に抽出した27名長屋の住民を対象として行った。

3. 建設初期の長屋の指向

【少し高給な人が住む長屋】

1. 高給取りのサラリーマン、公務員、学校の先生、そこそこ収入があった人が多いと聞いた。父親は事業をやっていたし。(M_12)(※1)
2. こち(阪南町)の長屋は 戦前は家賃高めで、公務員しか入れなかった。阪南町は郊外住宅地というイメージだった。王子町とはちょっと違う。こちらは、そんな高級という感じではなかった。(前庭_4)
3. 今はもうマンション建て替わったけど、すぐそこに戦前の大阪市長さんが住んでいた。ごっつい大きな邸宅があったし。(G_9)

【高級思考のつくり】

4. 立派な楠の木があつて。この辺(昭和町)の長屋といつてもたくさんある。その中でも、ちょっと前庭がついていたりだとか、門構えがありながらの長屋である家というのは、ちょっとプライドがあるというか。学校の先生とか、そういう人のために作って売出したんや、と言っているおじいちゃんもいました。作ったおっちゃんが、最低60年は持たな〜と気合いを入れて建てたと言っていた。(M_7)
5. 同じ長屋でも、プライドがある、そういう人が喜びそうな長屋を作ったんや、と言っていましたね。(M_7)
6. わたしはこれが普通やと思っていたけど、(外玄関と内玄関がある形式)これって珍しいんや。(M_9)

今回対象としている長屋は格式のある佇まい・設えを備えている点が特徴的である。その点を踏まえると、大工の考えとして門構えや前庭を設けるなどの高級思考の家を目指していたことがわかる(4,5,6)。それに応えるように、住人も一般よりも収入が多い人が住む傾向があったようである(1,2)。また長屋のすぐ近くに邸宅のお屋敷が建っていることも珍しくなかった(3)。現在でも邸宅の屋敷は当該地域で確認ができる。

4. 入居時から現在までの住み方の変遷

長屋への引越しから現在までの変遷を家族構成と部屋の使い方の変化に着目して個別事例を記述する。

(1)直接型-3(図1)(※2)

【昭和20年代】

戦後、結婚を機に引越してくる。夫妻寝室は2階6畳和室であり、母の寝室は1階4畳半和室である。食

事・居間は6畳和室である。

[昭和50年代]

子供が3人になり、2階4畳半和室を子供部屋とする。昭和54年には、老朽化が進み、使い勝手も不便であったため後庭に台所、便所、風呂を増築し、水回りを集約させる。それまで台所土間だった場所は納戸となる。食事・居間として使われていた1階6畳和室は、居間として使用のみとなる。同時に裏階段の勾配を緩くしている。増改築をした後は、1階6畳で過ごす時間が増えた。

[現在]

昭和60年、2階廊下があると、和室が続き間として使用することができないことに不便を感じ、また特に日常生活において、その廊下の必要性を感じることができず、それをなくして、4畳半を6畳に大きくする。増築された2階6畳は主に納戸として使用されている。2階に廊下がなくなったことに対しては特に不便は感じてはいない。

夫妻寝室がより裏階段に近い6畳和室に移動し、それまで寝室であった場所は納戸としている。

裏階段の活用

今は裏階段しか使っていない。後庭の増築部分に洗濯機があるので、裏階段で十分に生活できる。そのために階段の勾配は緩くした。この階段は便利。増築する前までは、便所に行く時くらいしか、使うことはなかった。最初は急だったし。ここの4件長屋はすべて裏階段が付いている。

増改築後の採光

長屋は元々そんなに明るいものではないから。確かに増築したら暗くなった印象はあるが、大したことはないし、特に意識したことはない。

住み始めから、夫妻寝室が2階、母寝室が1階と階数自体は変わっていないが、増改築により夫妻寝室を裏階段寄りに移動するなど、その時々で生活しやすいように、上手く対応させていることが分かる。

本来、裏階段の目的は2階の住民の1階の和室を通らない便所への動線の確保である。ここでは、後庭に台所など水回りを集約させ、居間と隣接させることで、日常生活の機能を後ろに配置することで、コンパクトにまとめが上げ、裏階段を使いやすくした。

元々は2階廊下は2つの和室の独立性を高めることを意図されていた。しかし住人にとっては必要性が感じられず、和室2つを続き間として利用する方が実用性が高かったといえる。

(2)前庭型-6 (図2)

[昭和46年]

奥さん(ヒアリング相手)は昭和46年に結婚し引越してくる。主人と母親は昭和36年から住んでいた。越してくると同時に、前庭の一部を駐車場にする。母親、夫妻寝室を2階にし、1階6畳和室は、食事・居

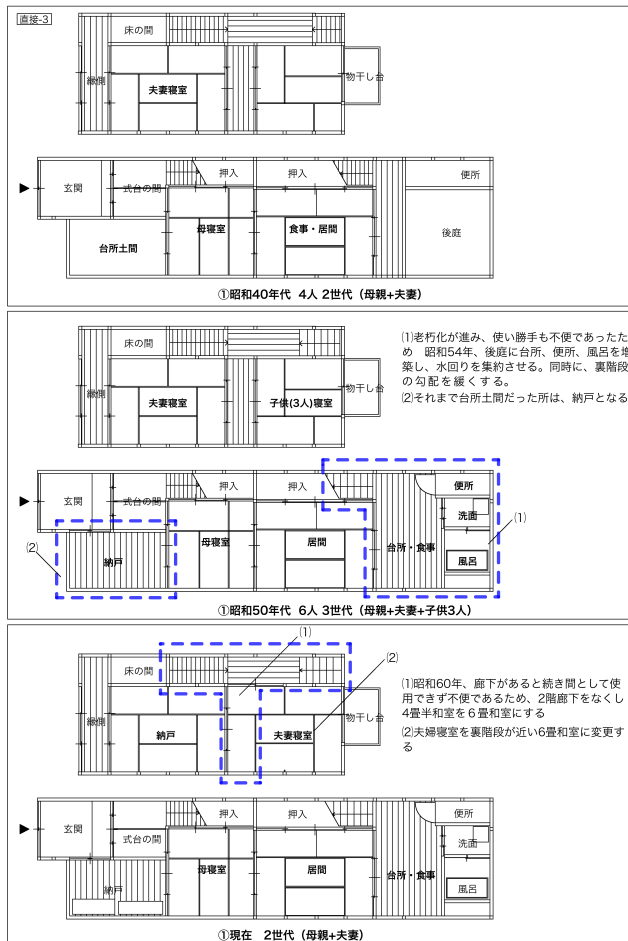


図1

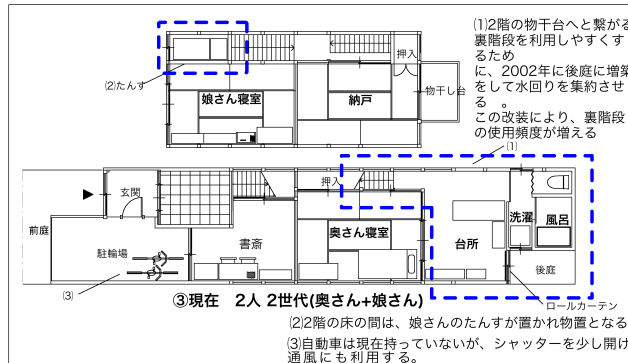
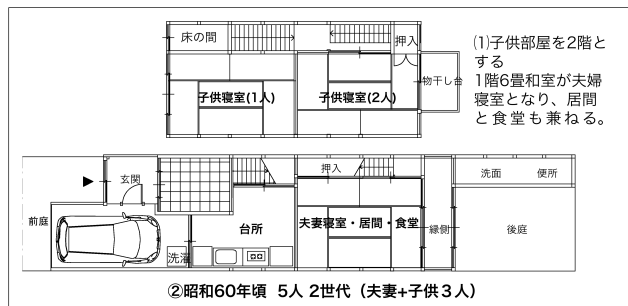
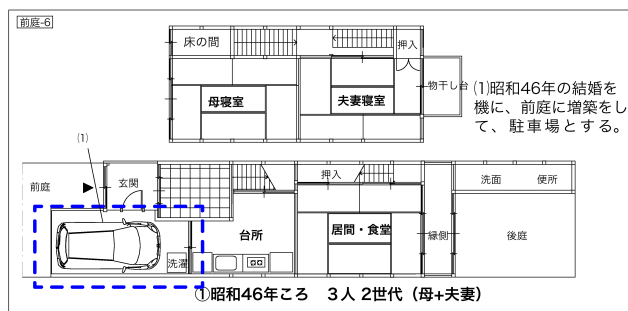


図2

間として使用する。

[昭和60年頃]

子供3人になり、2階を子供寝室とする。1階6畳和室が夫妻寝室+居間+食堂となる。

[現在]

子供2人は独立し、娘1人と2人暮らしである。2階6畳和室を娘さん1人が使用しており、床の間であった所は、現在はたんす置き場である。孫が遊びに来た時に使用する程度。裏階段を利用できないかと考え、2002年に後庭に増築することで、台所、風呂、洗濯を1つの場所に集約させる。「洗濯機→裏階段」の動線を意識し、同時に裏階段の勾配を緩やかにする。それまで台所だった場所は奥さんの書斎として利用される。自動車は現在使用しておらず、駐車場は自転車置き場となっている。普段からシャッターを開けておき、風の通り道として機能させる。

結婚当初は、夫妻、両親寝室を2階にし、1階は家族の集まる場としている。子供が生まれてからは、1階に夫妻寝室を持ってくることで、1階6畳和室を多機能な場として利用している。また、裏階段の活用を明快に意識した増改築を行うなど、それに対する積極的な利用意図が見られる。

(3)門塀_8 (図3)

[昭和40年代]

母と2人で長屋に引越してくる。母親と奥さんの寝室は、夏は1階6畳であり、冬は2階6畳として、季節により寝室をその都度変えていた。昭和54年には、2階に便所を取り付け、同時に裏側に3畳和室も増築する。食事は3畳和室、居間は6畳和室であった。

季節で場所が変わる寝室

寝る場所 夏は1階で寝て、冬は2階で寝ていた。2階は屋根瓦があって、1階よりもだいぶ暑いから。夏は蒸し暑いからね。親子とも移動していた。冬は2階の方が暖かいから、2階で親子で寝ていた。もう今は1階で寝ている。消防の人から、1階で寝てくださいと言われた。2階で寝てたら危ないからって。

畳の大掃除

町ごとに決まった日にちが決められ、なんとか町は何月、何日みたいに。畳の大掃除があった。ばんばんと叩いて。昭和40、50年くらいまでかな。年に1回の日本の行事として。夏の暑い日にやっていたよ。長屋の前にみんな畳だしてね。大掃除はもう大阪市がしなくなった

[現在]

奥さん1人暮らしである。2階は納戸のみの使用。

襖の取り外し・和室の目隠し

(襖は) 普段は閉めていたけど、この方が広くみえるから、今はこれで満足してる。襖を外した時には玄関から和室の中が見えやすいから、部屋の奥の方につい立てとか、屏風を立てておく。時々、上等な何層にもなっているものを置いたり。人が来たら、「ああ、立派なものがある、落ち着くわ」と言われたり。6畳和室にね。特に人を招くときには。式台の間と3畳和室との間にも、付いたてを置くことができました。

なるべく奥は見えないようにと。

家族人数が2人である点を生かし、夏と冬で寝室の位置を変えることで、上手く住みこなしていると言える。襖を外すなどのワンルーム指向であるが、屏風、すだれを用いて、人からの視線に対しては遮りながら、風は通すといった工夫が見られる。

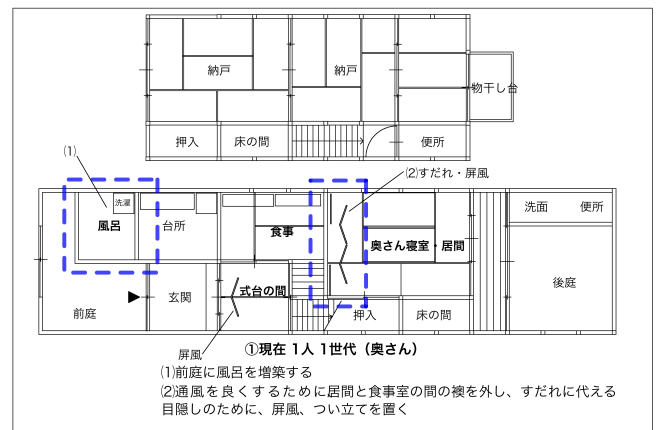
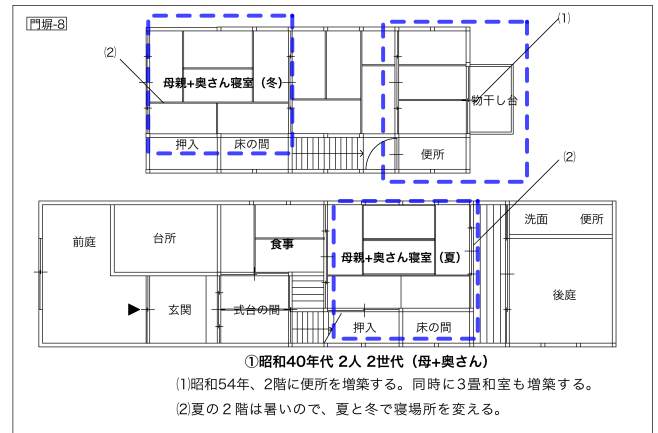


図3

4.2 家族構成と部屋の使いかたの変遷

家族構成を軸に、部屋の使い方の変化を並び替えると図4になる。住み始めは、ヒアリング対象者(奥さん, 主人)とその両親、祖父母などと一緒に住み始めることが多い。さらにその後、対象者が結婚し、子供が家族に加わると3世代家族となり、夫婦、子供、両親の寝室、その他部屋の使い方多様になる。一方、両親の引越し、死亡等により、子供との2世代家族になると、1階和室を夫婦寝室、2階を子供寝室とする家庭が(水色部分)大半であることが分かった。住人が高齢となった場合、現在の部屋の使われ方は、3種類に分類可能。i) 現在も子供と同居するタイプ。子供は既に成人に達し、実家から仕事に通う。ii) 夫妻が両親と同居しているタイプ。両親を介護するために、夫妻も両親も1階の同じ部屋を寝室としている場合もある。iii) 子供が既に全員独立して長屋を去り、現在は夫妻(もしくはどちらか)だけが暮らしているタイプ。この型が一番多い(8/12件)。1階を夫妻寝室とし、2階は子供が独立した現在では多くの場合におい

て、納戸となる。子供や孫といった来客が来た際に使用される程度である。

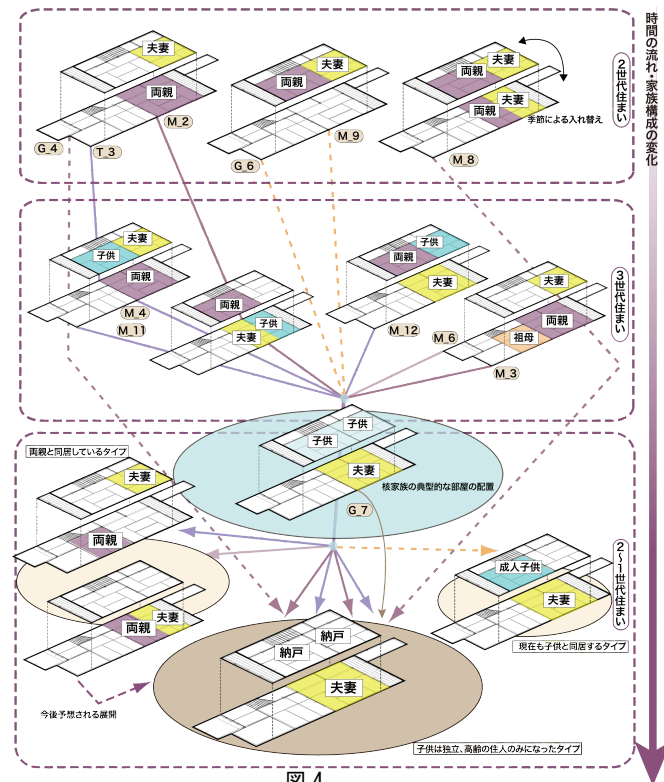


図 4

4.3 家族構成とその変化

これまで長屋は家族構成が変化してきたとき、時々の住民の要求に応じ、住み続けられてきた。そのような状況の中、長屋に引っ越してきた当時まだ子供であった世代(図5 夫妻世代)は、結婚し、子供を育て、高齢となった。子供が独立し、今では1人または2人で暮らす人も多い。結果として、生活の多くは1階のみで行われ、2階が積極的に使われることは少なくなってきたといえる。間口が狭く奥行が深い特有の土地において、部屋の構成や廊下の位置を工夫することでいかに合理的に住まうかを考えられてきた長屋であるが、家族構成が変化し、住民が高齢化した現在では、部屋の使用状況に偏りが生じている。世代交代と老朽化が同時に押し寄せた結果となった。

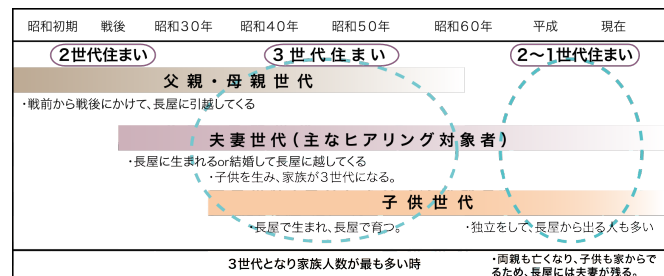


図 5

5 住みこなし方の実態と変容

ヒアリング内容を元に項目別に分類・記述・分析する。元のなったヒアリングも一部記載する。

5.1 住人と「かかりつけ大工」との継続的な関係

改修を手掛けていた大工について、特定の大工がいる長屋が多い。その中でも、昔は決まった大工がいたが、

高齢化・死亡により廃業等したために、現在は、近所の工務店、知り合い、紹介等によって、大工を変更した長屋が大半を占めている。昔は特定の大工を持ち、「修理をお願いしたらすぐに来てくれる。熟知しているのではないかな。」(1, 2)のように、「掛かり付けの大工」として存在していた。一方、住民と大工において長期に渡る付き合いがあったがために、新しい大工さんには頼みにくいという思いも生まれている。さらに現在は、改修を継続的に行わないために、昔のような関係は構築しにくいという事態もある。

1.今は決まった大工さん。20年近くの付き合い。近所の人にもこの人に頼んでいる。修理をお願いしたらすぐに来てくれる。熟知しているのではないかな。(G.1)

2.今は大工さんがおらん。もう亡くなったりして。木製の物干し台を作ってくれる大工さんがおらんからな。昔の掛かり付けの大工さんは、この長屋はこんな感じで、ここはこうという風に把握されていた。その人に頼んだら安心やった。どこの天井板開けたら、屋根裏に行けるとかも。(M.13)

5.2 老朽化に付き合うという姿勢

部分的かつ継続的な手入れの必要性が住人により意識されている。その際、中・長期的な改修計画を建てるというよりは、必要となった時に、その都度手を加えるというスタンスが取られる(1)。建替えへの願望があるものの、隣接長屋への影響を考慮して、躊躇する場合もある(2)。長屋とは改修しながら住むものだという共通意識が、住人の中にはっきりと存在する。

1.修理についての長期修理計画みたいなものは特にない。部分的に変えたりするのはあつ。その時その時ってこと。(M.15)

2.(長屋は1件がさぼったら皆に影響する。それに対する責任感)そこまで考えてない。それでも土地と建物が別なら、長屋の1件だけぶつと切って、1戸建てを立てるということはできない。切ったら壊れるわ。(T.8)

5.3 隣家の音に対する柔軟な対応

長屋のウラ側においては、トイレ・物干し台が路地を挟んで後方の長屋と対面してする。また隣住戸と壁を共有しており、1枚向こうはお隣さんである。そのような複数の住戸が連棟して成り立つ長屋から生まれる近隣関係の実態とその変容を明らかにする。

長屋は音が聞こえるものだ、という前提のもので住んでおり、音が聞こえること自体を気にしない人や、音が聞こえることは、隣家の住人もお互いが承知の上であり、もめる様なことがない人もいる。ただ、そのような場合でも、挨拶などの日常のコミュニケーションをとることで良好な関係が保たれている。一方で、音が原因で隣家とトラブルになることもある。

音が聞こえることが、お隣の存在を知らせる役目となり、さらには、安心感を与える場合もある(1)など、「音が聞こえてしまう」のではなく、「音が聞こえ合う」という積極的な捉え方をする愛他性がある。

改修を行い、建材を変えたことによって、隣家の音が聞こえやすくなったという、弊害も生じている。

1.ものすごく聞こえるわ。あ、今日はお孫さんが来てはるな、と。元気でよろしいやん。うちだって、息子2人が、たっただ走り回っていたし。それは、お互い様やし、あ、今日もいてるんやな、元気そうやなって何か安心するわ。(G.5)

5.4 表に物干し台をつけることの認識

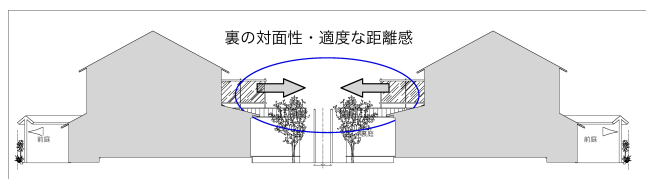
当時の慣習であったとする意見が最も多い。理由として、表側に見せるのは良しとはされない意識があった。また昭和初期は2階建の長屋がほとんどであり、現在のように3階建住宅が建っていない。つまり、物干し台が北側に付いていたとしても、日光を遮る障害物は現在よりも少なく、日当りは今日よりも良好であり、北側に干すこと＝日光があたらない、とは一概には言い切ることができない(1)。

夫妻世代は、洗濯物は表側に干すべきでない、との認識があるが、その子供世代である住人には、そのような認識は薄く、佇まいと実用性のどちらを優先するかで、世代間で認識の差がある(2)。

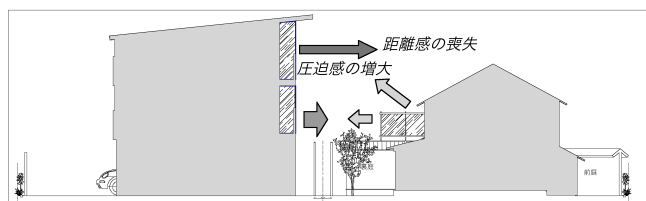
- | |
|--|
| <p>1.物干し台は、北向きだけど、昔は高い建物がなかったから。だから日当たりがそんなに悪くなるということはない。時間帯によっては、日が当たらないということもあったけど、昔はみんな同じような屋根の形やったから、お日様はなんぼでも入ってきていた。(M_13)</p> <p>2.若奥さん:おばあちゃんの時代はそういう意識があったかもしれない。でも私(40歳代)としては実用性を重視してしまう。だから、南側に干している。あまりにみっともない干し方はできないけれど、やっぱり南側に干せる方がいいかな。(M_3)</p> |
|--|

また、以前と比べて物干し台を介したコミュニケーションが変化した理由としては増改築による影響が大きい(図6)。特に3階に建替えられ、それまでは向いもお隣も同じ高さの物干し台の高さであったものが、高さの変更や、裏側の物干台の撤去によりそれ自体が取り払われる。また、戸建住宅を敷地一杯に建てることによって、物干し台間での程よい、距離感が失われてしまった(1)。

- | |
|--|
| <p>1.昔はあった。今時々。向いの家が3階建てになってからは、物干台の高さも違うし、会話はしなくなった。お隣の人はまだ会話はする。(2階の南側の物干台があるが、)南側に3階建ての住宅が建ち、南側でさえも日が当たらなくなった。冬になったら布団が干せない。しゃあない。(M_6)</p> |
|--|



長屋と長屋が対面していた以前の裏側



向いの長屋が建替わり3階建が建てられた時の裏側

図6

5.5 多様な機能を持つに至る現在の汲取路地

以前汲み取り路地として利用されていた場所は現在では、(1)通風(2)隙間利用(3)避難・脱走経路(4)精神的なゆとりなどの機能がある。他に改修時の大工の通路や、路地に室外機が置けるなど、ちょっとした物置場として利用される(1)。一方で、汲取路地が空き巣の侵入

経路になるなどの問題もある。

- | |
|---|
| <p>1.火災時の避難経路としての逃道になる。防犯の意味も兼ねて・改修時の通路としても。部屋の中を通るよりも、裏を通った方が大工さんも気が楽だし。しょっちゅう使うわけではない。(G_1)</p> |
|---|

5.6 葬祭時の役割分担における連携性と連帯性

以前は葬式は長屋の自宅で行うことが普通であり、近所の方達が手伝いながら行われていた。お茶、お寿司、おかず等の料理を作る際には、隣の長屋の台所を貸してもらう(1)など分担していた。それは、お葬式の日だけでなく、お通夜の時もそうであった。このような積極的に手伝う習慣が存在したのも昭和までである。長屋における葬式は、近所の協力を得て行うものであった(2)。特にお隣の長屋は、お坊さんの待機場所や、台所として利用されるなど、重要な場所であり、このような親密性の高い関係が存在した。

- | |
|---|
| <p>1.昭和40年前後までは、自宅で葬式をしていた。葬式が行われる両隣長屋がお坊さんの待機場になったり。また違う長屋は、炊き出しをするための場となったりした。1件の長屋だけなら狭いから。両隣の長屋は必ず使っていた。(G_4)</p> <p>2.葬式に手伝いに行ったり。炊き出し、お茶のご用意に行ったり。20年くらい前まではあったかも。(G_6)</p> |
|---|

近年の自宅での葬式を行わなくなることは、そこでの人との接触、人との知り合う機会の喪失にも繋がった。理由の一つとして、世代交代が起こったことである(3)。葬式が行われた世代とは、長屋に引越して来て、初代で入居した世代である。その世代までは、緊密な付き合いがあったものの、その世代の子供になると、親世代のような付き合いは減り、それまでの親密な関係は薄れていった。

- | |
|--|
| <p>3.長屋ができて、初代で入っている世代が亡くなり始めて、私(63歳)の父とか、母とか。初代で入ってきた世代の付き合いの時代から、だんだんとその子供の時代(私ら)に移り変わってきた。すると、もともと親の世代であった協力関係が薄れてきた。近所に迷惑かけないようにしよう、という考え方がでてくるようになったから。昭和40年代にはなくなってきたな。(G_9)</p> |
|--|

5.7 前庭-後庭、外玄関-内玄関を利用した通風

表と裏の開口部を生かすために、風の通り道を確保するために、襖の開け放しがされている。それにより玄関から奥座敷まで視線が通るので、それを考慮し、すだれが用いられる(1)。さらに、単にすだれを吊るすだけでなく、その位置を変えたり、季節毎にその長さを変化させるなど、住人各々の独自の工夫が発見される。

門扉の長屋では、外玄関と内玄関と2つの玄関が存在する。それらのうち、外玄関を閉め、内玄関は開くことで、前面道路からの視界を遮りつつ、中は開かれた風通しの良い環境が作り出されている。多くの住み手が「風通し」に対する意識が特に強いことがわかった。前庭、後庭の活用という点で、理にかなった住み方をしている(図7)。さらに、寝る場所も変えつつも、襖を取り外して開け放しにするなど、一つの方法のみでなく複合的に組み合わせた対処法により、暑さと上

手く付き合う生活を送ってきたいえる。寒さのしのぐ為の手段として火鉢は必需品であったといえる。その置き場所としては、多くの長屋で、1階の2畳～3畳の和室が多かった。ここは、食事室としての使用が主であり、夏場とは対照的に襖は締められ、家族が集まって暖をとっていた。

以上のように、夏・冬における住み方には様々な工夫がされていることが分かる。またそれらを可能にしている要因の一つは、襖の存在である。続き間、もしくは個室として利用するにしても、その「開ける」「閉める」「取り外す」といった行為が、住人の手で簡単に行うことができる点が寄与している。

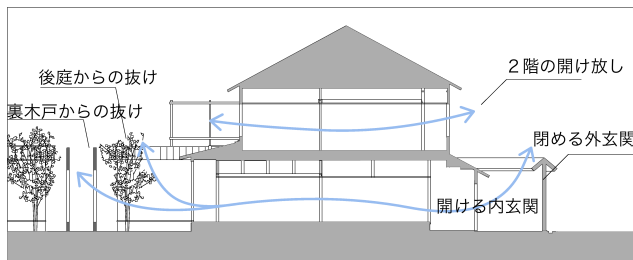


図 7

1. 汲取地があるから、風が良く通る。ものすごい風通しがいい。夏は涼しい。夏は朝起きると開け放す。今も昔も。夏は開け放しが多い。外玄関は閉めて、内玄関を開けておく。1階3畳和室と6畳和室の襖を麻カーテンにする。風通しを良くする。ひゆるひゆると揺れるしね。(M.2)

2 風が通るから、内玄関は開けておく。夏は網戸にした。夏は2階は、開け放しにして、蚊帳をつけて寝ていた。今はクーラだから戸を閉めて寝ている。(M.5)

5.8 夜中に便所に行く時の配慮

「長屋には、縦に通る廊下は普通はなく、特になくても、それはそれで生活できる」という認識を持ち、それを受け入れて生活する寛容性のある態度が示された。しかしこれは、「気を遣わない」とは、別物であり、寝ている側は、通りやすいように(1)、一方で、通る側は、寝ている人を目覚めさせないようにという気配りからである。

1. 気にしない。そお一通る。ただし、人が通れるように、あらかじめ布団を敷く時に、通り道を作っておく。主人の兄弟はもう自分の兄弟みたいなもの。工夫しながら住んでいる。(G.1)

5.9 鬼門意識が作り出す前庭_後庭の豊かな景観

鬼門を意識しないという意見がある一方で、多少なりとも意識をしているとの意見が大半を占めた。基本的には、物を置かないようにして、鬼門、裏鬼門の方角には、南天・サザンカ・ヒイラギなどの植木をしている。これらは結果として、長屋景観の重要な要素であるシンボルツリーを形成する。中には、門扉に「やいかがし」をしている長屋も確認できた。増改築の時には、住人というよりも大工さん方が、鬼門を意識していた。総じて、鬼門に対しては、建てる側が計画をする際に意識をしておき、現在の住人は認識はあるものの、それほど生活をする上で気にかけているわけでは

ない、ということが判明した(1)。

1. 鬼門の方角には、ヤツデ、ヒイラギを植えていた。今でもヒイラギを植えている。柵(ヒイラギ)に鯛(イワシ)の頭をさす。焼嗅(やいかがし)と言う。鬼門は清潔しておかなければならない。物置いたりしない方がいい。今の若い人に言うと、「そんなん言うてたら、住んでられませんわ！」って言われそうやけどな。
若奥さん(40歳代):私の世代はあまり知らない。鬼門は知っているが、とくに注意することも、意識することもない。普段生活をするうえで。(M.3)

5.10 前面道路から前庭空間の活用と評価

前面道路で子供が遊び、その姿が周辺住民から見られることで、弱い監視機能を生みだしている。

さらに、前面道路は、井戸端会議のようなご近所同士の会話や世間話を生み出し、お互いの情報交換をする場所を提供していたとの見方もできる。

このように前面道路では、それを媒介とし、「子供と子供」「子供と大人」「大人と大人」とを繋ぐ「前面道路コミュニティ」とでも呼べるような近所付き合い(1,2)が展開され、かつ周辺住人の幅広い年齢層に対して、様々な行動を喚起する有用性の高い場所であったと言える。

【前庭を介するコミュニケーション】

1. 昔:前庭で、秋口にうちわを持ちながら、さんまを七輪で焼いていた。前面道路からはそれが見える。「ああ、あのお宅今晚の夕食はさんまかあ。」と。ご近所の人とは、そういう仲だった。(M.1)

2. お正月には、木のうすを使って餅つきをしていた。台所も近いし便利やし。餅つき機はどこ家にもあるわけでもないから。ご近所さんにも少し分けたりして。そういう付き合いが昔はあったからね。
・七輪でさんまを焼いたり。七輪で使った練炭を火鉢で使ったりして。今はさすがにもう焼かなくなったけど。(M.8)

6. 今後の長屋生活の展望とまとめ

仮に子供世代と暮らす事になった場合は、そのまま長屋に住み続けるというよりも、大規模な改築をする、もしくは、二世帯住宅への建替えなどが行われる場合がある。すると親と子の二世帯での長屋生活を選択したものの、結果としては、建替え・大規模改築となり、長屋は原形からは姿を変えていくこととなる。

多くの住人が述べているが、駅が近い・人が良い・静かである等々の立地特性が長く住み続けることを可能にした要因の一つであるといえる。長屋の現状を踏まえた上での高い定住意識と、現実的な老朽化との2つの状況の狭間に置かれていると言える。

長屋の住人における周辺環境には2種類挙げられる。一つは、長屋単体や前庭・前面道路といったハード面。今一つは、単なる「近所付き合い」の域では止まらない近隣住人との豊かな関係といったソフト面である。それら両方を含めた周辺環境が持ち合わせる持続的かつ包括的受容力が、家族構成の増減・生活用品の増加・時代背景等の種々の変容に対する長屋住人の生活を受け止めてきたといえる。

(※1,2 長屋は主に、G:前庭型 M:門扉型 T:直接型 の3種類に分けることができる。番号はヒアリング者を示す)

討 議 等

◆討議 [倉方俊輔准教授]

全体としてよく調べられている。このような時間の流れの中で、世代によりどのように住まい方が変わってきたのか、という研究は最近よくある。それら既往研究との関係や位置づけが今ひとつ読み取れない。時間軸を考慮に入れた計画学や長屋の研究との関係は？

◆回答：阿倍野の長屋に関しては、都市計画的な観点からの研究や、長屋の前面道路からの表出を扱った研究はあるのですが・・・

◆討議 [倉方俊輔准教授]

共時的な研究は計画学でもよくある。でも最近の変遷を追って行くというような、通時的な研究が割とある。時間軸でみた時に、冗長性があるから、計画的に上手くできている、というような。それらの研究との位置づけが読み取れない。

◆回答：長屋を増改築の視点からその変遷を辿った研究はあります。

◆討議 [倉方俊輔准教授]

通時的な研究というのは最近あるんです。だから、それはそれでいいと思う。しかし、位置付けが曖昧で、視野が阿倍野、阿倍野と、そこに限定されてしまっている感じを受ける。

◆討議 [鈴木広隆准教授]

廊下がなくて個室化されていない事が特徴であると説明がありましたが、それと実際の使われ方との関係はどうなっていますか。事例には大体いい話しが挙っていましたが。実際には、この5年間で3割の長屋が消滅しているわけですね。良い所があるのになぜ減少しているのですか。

◆回答：個室化されていない事と、実際の使われ方の関係ですが、例えば季節により部屋と部屋を仕切る襖の開閉を使い分けることでその部屋の使い方を変化させています。

2点目に関してですが、ヒアリング対象者の夫妻において、子供と住むことを選択した場合は、2世帯、3世帯住宅となるために、結果として、大規模な増改

築や建替えをせざるを得ない状況になることがあります。このように家族で住み続けようと選択したがために結局は長屋を取り壊すことになるというジレンマも存在しています。問いに対する答えとしては、ずれてしまいましたが・・・

◆討議 [佐久間康富助教]

途中で世代継承の図がありましたが、今後どうなるのでしょうか。子供世代が出て行って、高齢化して建替えが進んで長屋が無くなって行くのか、世代継承が進んでいき上手くハードとして住まいこなされていくのか。そのような状況について教えてください。成熟していく世の中に対する手掛かりとしたい、という話しでしたが。

◆回答：長屋単体のみで考えていくには、限度があると思っています。今まで住み続けられてきた要因としては、近所の方との関係といった、大きく捉えた周辺環境が大切であったことです。長屋単体では成立し得なかったです。それらを今後どう扱うかではないかと考えます。

◆討議 [佐久間康富助教]

全体の中での成立している仕組みが大事であったと。

◆回答：そうですね。また最近では1件のみ改修して店舗として利用されるケースも増えてきていますが、それらのみでは限度があるのではないかと考えています。

◆討議 [佐久間康富助教]

そのような状況を個人的にどう思っていますか。

回答：致し方ないかなと。ただ、ヒアリングをした方のお話を伺うと、みなさん口を揃えたように、ここは住みやすいとおっしゃる。近状付き合いが減ってきているとはいえ、まだ存在しますし、その立地も良いと。住宅としてどう活用していくかが問題ではないかと、捉えています